瑞応寺周辺赤色立体図
（■は今回の発掘調査区）

令和４年度 埋蔵文化財発掘調査

長宗我部一族の寺跡
第一次調査現地説明会資料

－長宗我部氏の菩提寺瑞応寺を求めて－

記者発表：令和５年２月９日（木）午前１１時～正午（雨天中止）

現地説明会：令和５年２月１２日（日）午前１１時～正午（雨天中止）

南国市教育委員会

1．調査に至る経緯と経過

岡豊山に位置し、戦国大名長宗我部氏の居城として知られる国史跡・岡豊城跡。岡豊山主郭部の発掘調査では、曲輪に伴う多数の建物跡が検出され、詰で天正三年銘の瓦が出土するなど、徐々に遺跡の規模や様相が明らかになってきました。北麓には長宗我部一族の墓と伝わる五輪塔などの石造物群が所在し、近くには玄陽院・瑞応寺・東谷庵などがあったとされますが、その様相は長らく不明でした。

南国市教育委員会では、この長宗我部一族の菩提寺の様相を明らかにしようと発掘調査を実施しました。

2．発掘調査の概要

所在地　　南国市岡豊町小蓮字重岩
調査遺跡　長宗我部一族の寺跡
調査目的　範囲内容確認のための学術調査
調査期間　令和4年12月5日～令和5年2月末（予定）
調査主体　南国市教育委員会

調査区風景

3．研究史にみる瑞応寺

『長宗我部地検帳』には「北谷」に瑞応寺があったとされる記述があります。現在北谷という地名は残っていませんが、岡豊山北麓の谷間にある広大な平坦面がいくつも連なる場所を瑞応寺に比定していました。

また、長宗我部家臣の子孫で土佐国出身の吉田孝世が宝永５（1708）年に記した『土佐物語』によると、瑞応寺は19代長宗我部兼序を祀った千歳山兼序寺を21代元親が再興した寺であるとされています。再興の理由は、父の国親（戒名：瑞応覚世大居士）と母（戒名：祥鳳玄陽大姉）を祀るためで、祥鳳山瑞応寺と称されます。そして、慶長年間（1596～1615）元親が城を大高坂に移した際には、瑞応寺も岡豊から猿が馬場洞島（現在の高知市洞ヶ島町）に移した、ともあります。

瑞応寺は長宗我部期には、土佐第一の寺院であり、近世でも土佐藩の有力寺院として栄えていました。

ちなみに、江戸時代の瑞応寺の住職としては、薫的和尚が有名です。薫的和尚の墓を瑞応寺境内に改葬し、祀られるようになったのが薫的神社です。

一方で、昭和34（1959）年岡豊村が閉村する際に編纂された『岡豊村史』では、長宗我部地検帳の記述で兼序寺と瑞応寺が別々の場所に記されていることに触れ、瑞応寺は兼序寺とは別に蓮如寺村に建立され、元親が大高坂に移る際に兼序寺・瑞応寺を合して移築されたとされる説を提唱しています。瑞応寺が移転した後、この場所は近年まで耕作地として利用されていました。

4. 調査結果

今回の調査では、岡豊山北麓に複数ある平坦面のうち面積の広い２か所（下段・上段）を調査しました。

下段　石積

上段　検出状況

（1）下段　中世の大規模造成と近年の石積み

下段にあたる最も広い平坦面は、中世に造成されていることがわかりました。もともと谷の緩斜面であった場所に山を削った土を盛るという大規模な造成が実施され、広大な平坦面を人工的に作り出しています。造成土は、水はけを良くするために蛇紋岩風化礫を大量に混ぜ込んだ土や、雨が降っても造成土が流れないよう土留めの役割を果たす粘土質の土など、用途ごとに使い分けた土を適所に盛っています。さらに、１度造成された後、平坦面を広げるために２度目の造成をしていることもわかりました。２度目造成後の広さは推定約８６０㎡、深さは１ｍ３５㎝以上、層数にして４０層以上にも及びます。加えて、１度目の造成土内には土器が全く含まれないのに対し、２度目の造成土には土師質土器の皿や鉄を溶かす際に使われるふいごの羽口などの鍛冶関連遺物が含まれることから、ある程度の時期差があると考えられます。

下段　中世造成土

（2）上段　瓦と茶道具・貿易陶磁器

上段では、近代の溝状遺構１条、時代不確定の溝状遺構３条、焼土が検出されました。遺物は、屋根に葺かれていた瓦や、茶道具である茶臼・天目茶碗・菊文様の陶器片や中国製の青磁・染付の磁器片などが出土しました。

（3）遺物にみる下段と上段の性格差

遺物は、総じて中世以降のものが出土していますが、下段からは主に土師質土器のみ出土しているのに対し、上段からは茶道具や貿易陶磁器などの奢侈品が出土することから、平坦面ごとに用途が異なっていたと考えられます。

下段　遺物出土状況

下段　出土遺物の一部

上段　出土遺物の一部

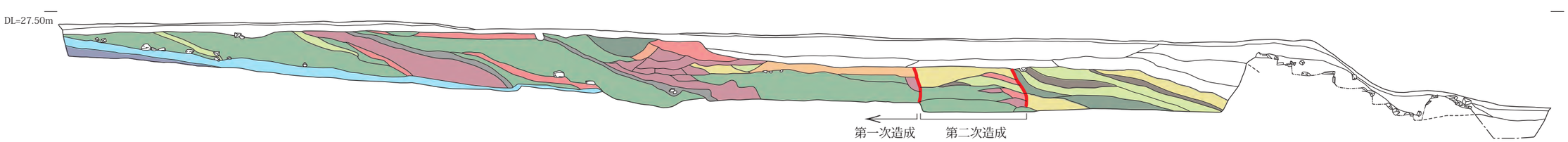
（4）近代の石積

下段平坦面の北端・西端において、土混じりの人為的な石積を発見しました。これは、平坦部を再利用して耕作を行うため近年に土留めとして石積が成されたものであると考えられます。

5. おわりに

岡豊山北麓に複数ある平坦面のうち面積の広い２か所（下段・上段）を発掘した今回の調査では、中世に大規模な造成をしていたことや、平坦面の用途が下段と上段で異なることなどがわかってきました。

今後は、他の地点の発掘調査を継続して実施し、寺の姿を明らかにしていきたいと考えています。



- 地山
- 旧表土（旧山の斜面）
- 礫のみ、礫を非常に多く含む
- 礫を多く含む・やや多く含む　砂質シルト
- 礫を含む　砂質シルト
- 礫を含む　シルト
- 礫を含む・若干含む　シルト
- 礫を多く含む　締りが強い　シルト
- 粘土質シルトに砂質シルトが多く混じる
- 粘土質シルトに礫を含む・若干含む
- 粘土質シルト
- 炭化物を含む
- 黒褐色

0　2m
（S=1/80）

下段　中世造成土　土層図